

チェルノブイリの犯罪

ヴラディーミル・チェルトコフ

発表時間が限られているので、すぐさま本題に入りたいと思います。手短かに言えば、チェルノブイリは犯罪であるということです。研究所の実験動物のように、子供たちを使って犯罪的な政策が行われたのです。つまり、フランス、ドイツ、スイスの専門家、またWHO世界保健機関やIAEA国際原子力機関、欧州委員会、フランス、ドイツ、スイス、CEPNのような非営利の非政府組織NGO、ムタディス・コンサルタント社、エートス、コールがグルととなって、その犯罪に加担しているのです。.

福島事故によって 汚染された土地で暮らしている日本 の住民と子供たちにも、同じ運命が待ち受けています。 というのも、同じ権威機関の庇護の下で、同じ当事者が、同じ疑似科学的な正当化によって、同じ戦略を日本で実践しているからです。

私がこれからお話するのは、とりわけ科学界、政界、国際社会のせいで、ベラルーシの子供たちがどのような仕打ちを受けたのかということです。

まず第一に、チェルノブイリ 事故の被害管理についてお話しします。国連の諸機関は、原子力と健康に対して責任を負ってはいないものの、IAEAは原発の推進機関であり、またWHOはその憲章の第一節で謳われているように、「すべての人民を可能な限り、高い健康状態に導くこと」を目的としています。

IAEAとWHO、この二つの機関は、その科学的、医学的権威の高みから、国連安全保障理事会の理事国五カ国の政策に賛同しています。その政策は、おおむね原子力分野に関するものであり、かつチェルノブイリ、福島の汚染地に関するものですが、まさに犯罪とも呼ぶべき政策です。

この政策は、科学性をそなえたようにみえますが、科学とは全く無関係の無知の戦略の上に立脚しています。チェルノブイリを説明するために、広島の実験を使うという原子力ロビーのトリックなのです。

広島と長崎の原爆爆発の閃光による非常に高い線量と比べれば、チェルノブイリ地域の線量は低線量です。したがって、チェルノブイリ地域で見られる症状が事故によって生じたとするのは、経験的に言っても不可能であるという説明を耳にします。

しかし、広島・長崎と健康への影響メカニズムはチェルノブイリの場合とは別ものです。チェルノブイリでは、核爆発はなかったのです。起こったのは、熱爆発が二回。次いで火事が10日間続きました。

今日、チェルノブイリ原発周辺のバック・グラウンド線量は低いです。しかし莫大な量の 人工放射性核種が熱 爆発の際に放出され、火事によって非常に遠方で飛び散り、風や雨によってさらに拡散されました。

放出された放射能は、半減期が長い核種なので、環境や植物は汚染され、動物と人間は被ばくしています。また 事故収束作業に従事した数十万の若いリクビダートルは、原発 付近で作業をしたために、放射能の粒子を摂取したり、吸い込んだ結果、健康が損なわれ、生命を落とすことにもなりました。また、放射能は、これから生まれてくる世代や 住民の子供たちをも被ばくさせます。というのも、住民は、30年にわたってこれらの放射性核種を摂取し続けているので、ますます病気になるのです。しかし、WHOとIAEAが認めているのは、最初に収束作業にあたったリクビダートルのうち、死亡した54名と、

事故関連とされているガンで死亡した 4000人だけです。2001年のウクライナとロシア連邦の公式データによれば、実際には、関与したリクビダートル80万人のうち、10%がすでに死亡しており、30%が障害者になったと 報告されているにもかかわらずです。

放射能で汚染されたベラルーシの地域には、農民が200万人、子供が40万人住んでいますが、チェルノブイリ事故の影響を受けていないといわれています。年々非常に多くの病気が増え、症状も悪化していますが、公式にはストレスのせいとか、「放射能恐怖症」のせいとか、親のアルコール依存症などのせいにされています。

私がスイステレビ局のためにキエフ会議を撮影した際、IAEAの官僚であるゴンサレス氏は、次のように言明しました:低レベルの放射能があるからといって、放射能と病気の因果関係の証拠とすることはできない。それは、解決不能な認識論上の問題だ、と言いました。ゴンサレス氏は「このレベルにおいては、直接に知識を得るいかなる手段も 持っていません。私たちは知らないのです」と文字通り言いました。

一方、バンダジェフスキー教授 は、9年もの間厳密な科学研究を行い、いわゆる無知を徹底的に糾弾したために、投獄され、亡命せざるを得なかったのですが、これは既に私たちの知るところであります。ゴンサレス氏は物理学者でしたが、ユーリ・バンダジェフスキーは解剖病理学者 ですから、IAEAの公務員では得ることができなかった<直接的な知識の手段>を究めていたのです。IAEAは因果関係の可能性があることを認めようとしませんでした。しかし、バンダジェフスキーは、その因果関係を発見し、体内に吸収された低線量の放射能核種と 人体に欠かすことの出来ない 臓器の破壊の間には、結びつきがあることを立証しました。

私の取材過程でわかったことですが、非政府組織(NGO、ないしは日本のNPOに相当)のメンバーであるフ ランス人の専門家が、この政策を積極的に推進していました。この政策のせいで、被害が大きくなり、ベラルーシの子 供たちは、放射線防護対策も、質の高い医療支援も施されることなく、これまでに聞いたことのないありとあらゆる放 射能関連の病気に苦しむことになったのです。

こういったフランスの民間組織は、ヨーロッパの豊かな国々から財政支援を受け、住民の被ばくデータを収集し、過剰な被ばくを避けるための方策について講釈を述べますが、被ばくした子供たちを治療することはなく、ただ観察しているのです。もっとひどいのは、被ばくした子供たちに、ネステレンコのベルラド放射線防護研究所が要請しているベクテンをベースとした天然サプリメントの 配給支援を拒否したことです。ネステレンコは、たったひとりで、私たちの充分ではない支援をもとに、子供たちの被ばくレベルをなんとか、これ以上増大すると臓器の疾患が取り返しのつかなくなる 限界値以下におさえようと努力しました。

30年前に始まったこの話の立役者は誰なのでしょう。彼らの目的は何でしょうか。正確には何を意味するのでしょうか。第一の主要人物は、ヴァシーリ・ネステレンコです。ヴァシーリ・ネステレンコは、チェルノブイリ 事故の被害に対して 旧ソ連政府が何もせず、虚言を勞していた 事態を前にして、事故当初から 異議を唱え、火災を起こしている 原子力発電所から半径100キロ圏内に住む住民を避難させるように要請しました。ヴァシーリ・ネステレンコ教授は、 物理学者でアカデミー会員、ベラルーシ科学アカデミーの原子力研究所の所長でしたが、警鐘を鳴らし続けたので、パニックをおおる人物として1987年7月に要職から更迭されました。そしてついに 1990年には国家機関を離れ、ベルラド独立放射線防護研究所を創設しました。それは、放射性降下物によって 汚染された地域に住む子供たちに援助の手を差し伸べるためでした。

ネステレンコは、ベラルーシの最も汚染された村々で、370もの地域放射線測定センターを組織し、そこ で、被ばくを少なくするために食料をどのように扱えばよいのかを、医者、教育者、放射線防護の看護婦や家族に教えました。当初は政府から財政支援を受けていましたが、それはソ連崩壊後の『民主化』のわずかな期間の間だけでした。今日、現地は原子力ロビーの手によって掌握されてしまったので、これらの地域センターはすべて閉鎖されてしまいました。

1996年、ネステレンコは、セシウム137の吸着剤としてウクライナ保健省 が推奨したリンゴのベクテンを もとにした食品サプリメントを採用し成功を収めました。一ヶ月間ベクテンを与えると、子供の臓器にある放射能核種 の60-70%を削減させることができました。

第二の主要人物は、ユーリ・バンダジェフスキーで、この人物は際立っています。 1994年、ネステレンコは、ユーリ・バンダジェフスキーと初めて知り合いました。バンダジェフスキーは、医者であると同時に解剖病理学者でもあり、当時は、ゴメリ州にある医科大学の学長をしていました。バンダジェフスキーは、汚染地帯に住む人々の新しい症例の病因を1991年から研究していたのです。バンダジェフスキーは、 心臓の形態上および機能上の変質が起こる頻度およびその重篤な症状が、臓器に取り込まれた放射性セシウムの量に比例して増大することを、心臓科医で小児科医でもあった妻ガリーナとともに、発見 したのです。バンダジェフスキー は、それを『セシウムを原因とする心臓疾患』と名付けました。幼児や、青少年、成人にも 発生する心臓トラブルで、心筋の劣化を伴います。あらゆる年齢、子供にも突然死が起こるのです。被ばく量が体重の1 キロあたり50ベクレル以上であると、生命維持に必要な不可欠な臓器に取り返しのつかない損傷が現れます。1996年から、ベルラド研究所とゴメリ医科大学は、一緒に仕事を開始します。ネステレンコは村々を訪ね歩き、西欧の非政府組織から寄付されたホール・ポディー・カウンターを使って、セシウム137の臓器への内部被曝を 測定することに専念します。

二つの研究機関は、セシウム137が少ない食事療法を行えば、子供にとっても実験動物にとっても、重要な臓 器の不可逆的な損傷を回避できることを明らかにしました。科学にとって、全く新しい研究の道筋が開かれたのです。

1999年の4月、ネステレンコとバンダジェフスキー は、保健省放射線医学研究所が記録している被ばく量の データと、同研究所がチェルノブイリ事故の影響 を医学的に研究するために使っている国家基金の用途を監査する委員会に加わるよう、ベラルーシ議会から依頼を受けました。二人が出した結論は、保健省に関係する委員会によっては気に食わないものでした。

バンダジェフスキーとネステレンコは、別々 に報告書を書き、住民の健康を管轄するベラルーシ安全保障理 事会に送付します。理事会は、保健省から被ばく線量データファイルを取り下げ、ネステレンコとバンダジェフスキーの結論をもとに、緊急に再検討するよう保健省に求めました。

バンダジェフスキーは、ルカチェンコ大統領に報告書を送り、その中で保健省研究所の作業指針を厳しく批判しました。また、研究所が、1998年、基金170億ルーブルのうち、わずか10億ルーブルしか有効に使っていないことも明らかにしました。1999年7月13日の夜、バンダジェフスキーは、ルカチェンコ大統領によるテロ防止法令に基づいて逮捕 されました。2001年6月18日、ベラールシ最高裁判所軍事法廷にて、何の証拠もないにもかかわらず収賄の罪で禁 固8年の刑を言い渡されました。次に、エートスについてお話しします。そうこうしているうちに、1996年、エートスという名前のフランス 人の研究者グループが、ネステレンコ教授が管理していたオルマニー村の放射線測定センターに入り込んできます。エートスは、フランスの1901年の法律に従えば、非営利NGO組織になりますが、このエートスは、測定 データを入手すること、チェルノブイリ事故による放射能廃棄物の放出という前代未聞の実験室を使って放射線防護について学ぶことを目的としていました。

エートスは、CEPNという核分野における防護評価研究センターから出てきた組織で、CEPN自体はフランス 電力EDF(フランスの原発管理者)とフランス原子力・代替エネルギー庁CEAによって創設され、それにのちに2001年 アレヴァ社となるCOGEMA(仏核燃料公社)が加わることとなります。つまり、エートスとは、フランスの原子力ロビー勢力の寄せ集めにほかならないのです。

エートスの目的の一つは、 原発事故及び半減期の長い放射性核種に汚染された地域の管理についてEUのために書き残すことでしたが、その際、「放射能の質と社会的信頼を長期に渡って管理する体制」を明確にすることを目標にっていました。

1996年から98年までの3年間にわたって、エートスは、オルマニーの地域測定センターの測定データ を蓄積し、ネステレンコが食品の放射能検査をするために教育した職員を私物化して、残業代も出さずに超過勤務をさせました。

このように、しばらくは、エートスにとって実り多きネステレンコとの幸せな共存関係が続きましたが、それも、エートスがネステレンコを、オルマニー村をはじめとするストーリン地区の4つの村から追い出したことで、終わりました。

実際、エートスという組織は、ネステレンコから学んだ挙句に、ネステレンコを追放し、データを独占したのです。まさに、ネステレンコの仕事を盗用したのです。しかも、エートスにはもうひとつ重大な欠陥がありました。それは、エートスがフランス原子力ロビーによるプログラムだったために、健康面に全く介入できないという如何ともしがたい限界があったことです。つまり、エートスは、住民の健康を扱う権限を持っていなかったのです。健康面をみ

ることができないならば、いったい何をしにやってきたのでしょうか？ 私がこの事実が気がつき始めたのは、社会学者である友人のことがきっかけでした。友人は自分の研究の

枠組みの中でエートスに協力していたのですが、エートスプロジェクトを率いているジャック・ロシャールはフランス 原子力・代替エネルギー庁CEAの人間だと、私に教えてくれたのです。そして、ジャック・ロシャールが「エートスは現場を占拠しなければならぬ」という驚くべき表現を使って、エートスの任務を定義していることをききました。

ネステレンコのところでの研修が終わると、エートスは、自らをチェルノブイリでの放射線防護の科学的基準としてふるまうようになりました。そして、その後、コール・プログラムというプログラムに形を変えました。コールとは「チェルノブイリ事故で汚染されたベラルーシの汚染地帯における生活条件再建のための協力事業」の頭文字をとった名前です。このプログラムの立ち上げには、ベラルーシのチェルノブイリ政府委員会、国連開発計画WNUF、ドイツ、フランス各国の大使館、EU、スイス開発協力庁、ユネスコ、世界銀行、それとベラルーシの4つの地域が関わっていました。

2003年6月18日、私は、「ベラルーシ・チェルノブイリの子供たち」という NPOの名前で、このコール・プログラムを細かく批判した文書を、国会議員、政府当局およびヨーロッパの諸機関に送りました。その際、追記として、以下のよう書きま

「チェルノブイリ事故のせいで、そこに住む子供たちの80%以上が病気になりましたが、このコール・プログラムは、その地域の健康問題を無視しています。1986年以前は、病気の子供はわずか20%しかいませんでした。コール・プログラムの覚書には、プログラムが効果的であったかどうかを審査するために、プログラム開始から5年後に、独立した監査をすると記されています。

私たちの批判は、コール・プログラムの開始時点で既に考慮されるべきであると考えます。なぜならば、汚 染地域の健康状況はますます深刻化し、疫病のように広範囲に広がっています。被ばくした人々は、国際社会から17年もの間見捨てられてきたのです。にもかかわらず、コール・プログラム開始からさらに5年も待つことなどできません。おまけに、コールには、高度な医療措置の介入は予定されていないのです。」

このように書いて送ったものの、返事はありません。コール・プログラムに対する予算は、400万ユーロ と見積られています。これは、様々な参与団体からフランス外務省とフランス放射線防護・核安全研究所 IRSNを通して、フランスに与えられます。EUはというと、200万ユーロ拠出することを決めました。エートスはコールによる この活動の役割は明らかです。これについては、ルモンド紙が明確に書いています。その記事のタイトルは、「フランス、チェルノブイリ級の事故被害に備えるために現地へ」となっており、記事には、フランス原子力安全局ASNは、「チェルノブイリ事故後管理のフィードバックについて研究を始め、その任務をミュタディスとエートスに託す。

この活動の目的は、『フランスおよびEUの社会的、経済的、政治的文脈で、このフィードバックがどこまで妥 当であるかを評価し、またそこから、フランスが地域および国際レベルにおいて、事故後の管理防止措置として学習できることを引き出すことである』」

2007年3月19日付の総括レポートは、「ベラルーシにおける事故後管理のフィードバック」と題され、ミュタディスのジル・エリアル＝デュブリユ、核分野における防護評価研究センター＝CEPNのジャック・ロシャール、パリ・グリニオン国立農学院所属のアマリ・オラニョンの3名による署名がなされています。3人は、皆コール・プログラムの指導者でした。

このように、エートスは、原子力推進国家と原子力ロビーに政治的にも財政的にも支援を受け、見かけ上は、チェルノブイリ事故が引き起こした問題を援助するふりをしていたものの、実のところ、健康上の多大な被害を認める上での大きな障害となり、ネステレンコやバンダジェフスキーのような独立した立場にある科学者を妨害したのでした。

他方、被ばくした子供たちは、モルモットになり、手つかずの状態で見守ることができる純粋な生体として残されました。というのも、吸着剤を使って、内部被ばく量を下げる措置が取られなかったからです。コール・プログラムが、ベクテンのための資金提供を拒否したのです。このような妨害措置は、まるでバズルのピースのように、世界のあちこちで、一見するとバラバラに行われていたましたが、最終的には、ヨーロッパの豊かな国のひとつであるフランスで、大規模な原発事故後処理に有効なデータの収集という形で仕上げられたのでした。

ユーリ・シチェルバクは、医者でもあり、作家でもありましたが、1990年、ウクライナの緑の党を率いて、ソ連「民主」ソビエト最高会議の国会議員に選出された人物です。彼が私に言うには、「チェルノブイリ事故でいったい何が一番重要かと、あるフランス人の教授にきたところ、『実に興味深いですよ。私の研究室では、こんな経験は絶対できませんからね。ここでは、それが観察出来るんですよ』と言うんですよ。あの人たちは臆面もなくこんなことを言っているんです!」とシチェルバクは結論づけました。

シチェルバクが腹を立てていたこんな臆面もない様子が、ヨーロッパ国家レベルで、プログラムとして立ち上げられていたなんてことを、シチェルバク自身が想像していたかどうか、私自身は知りません。自分たちの子供をどうやって守るかに研究するために、ベクテンのように効果のある自然食品をチェルノブイリの子供たちに予防策として与えることを拒否する。これは、犯罪です。大きな原発事故はフランスで将来起こるかもしれませんが、まったく予測 不可能なものです。そのような予測不可能なことを前にして、フランス原子力安全局 ASNのシミュレーションが何らかの意味を持つかどうかを考えてみてください。こんなことは許されることではありません。

私は、ジャック・ロシャールに手紙を書きました。「チェルノブイリ汚染地域での放射線防護は、科学的手法なしには不可能です。つまりそれぞれの子供の身体に応じた科学的手法や、それぞれの食品に応じた科学的手法がとられるべきです。しかし、それをベラルーシ保健省は拒否しています。そして、間違っただけ統計データを発表し続けています。

そのため、保健省は、ネステレンコ教授のやり方に反対しているのです。ネステレンコ教授は、ホール・ポディー・カウンターを使って具体的な実際上の内部被ばく量を計測しています。これこそが、子供たちそれぞれを予防するために必要不可欠な方法です。また、解剖病理学者バンダジェフスキーが研究している様々な疾病と体内に取り込まれた放射性核種の量との間の相関関係を打ち立てるために不可欠な測定でもあります。

しかし、それは、まだ始まったばかりであるチェルノブイリ事故の被害の大きさや隠されるみに出すこともつながらります。科学には目を向けず、ただ教育をして社会的にサポートしていれば、被ばくの悪さを覆い隠せますし、いいアイバイ作りにもなります。しかし、その結果、すべては、「無知と不確実」のままに置き去りにされるのです。

ベラルーシの人々が自分自身で運命に立ち向かってほしいとロシャールさんが願うのは正しいことです。しかし、ベラルーシ人とは、まずネステレンコのような科学者のことです。つまり、知識にせよ、きちんとした放放射線防護策を設定できなければ、放射線防護はまったくないということです。いずれにせよ、そのような科学者がいなければ、かわいそうなお百姓さんは、裏にはまるだけで、知識も手立てもありませんし、自分の運命に自ら立ち向かうことはできません。ネステレンコが作った370の地域測定センターは再建されなければなりません。

Wladimir TCHERTKOFF